

私が源氏物語に最初に出会ったのは、親戚のお姉さんの部屋にあったコミック「あさきゆめみし」である。

そこには大人たちの、複雑でハラハラするような恋愛模様が描かれていて、まだ子供だった私は、憧れを抱きつつも、たいへん衝撃を受けたものであった。

その「源氏物語」を、小学校3年～6年生の子供たちが一体どのように演じるのだろうか。

楽しみと同時に少し不安を抱きつつ、作品を拝見した。

「宇治っ子朗読劇団☆Genji」と劇団名に冠してあるとおり、朗読形式で上演され、子供たちは台本を持って演じていた。

「台本を持つ」という行為により、俳優（子供たち）と演じる役との間に一定の距離感が生じていた。

しかしその距離感が、観客と作品の間に一種の安心感を生じさせ、源氏物語の世界観をさわやかに楽しむことができるよう、うまく作用していたように感じた。

したがって、複雑なストーリーや和歌も、スムーズに頭に入ってくるのである。

見ている側が知識を得たり、風雅な源氏物語の世界観を想像する楽しみも味わうことができるよう

丁寧に作られていたように思う。

また、子供たちが美しい衣装をまとい、台本を持ちセリフを語るのだが、朗読劇だからこそ生じる、劇世界をはみだす「瞬間」も存分に楽しめた。

朗読劇の面白さは、その世界観を逸脱する瞬間にあると、私は思っている。

俳優が「読む」という行為を逸脱する瞬間、劇場の空気が変わり、作品の新たな側面が垣間見えるのである。

俳優の予期せぬ個性のようなものが見える一瞬が、朗読劇の中で

こんなに面白く、光り輝くのだと、改めてうれしい発見をさせていただいた。

一部ではあるが、台本を扇代わりに使用する場面がみられた。

もし台本を小道具に見立てるのであれば、扇だけでなく、もっと他の表現を取り入れてみてはどうだろうか。

台本を持ちながら、さも持っていないかのように演じるのではなく、

台本を持っているからこそ、その存在を生かして演じる方法を探ると、

より劇団のスタイルが確立され、作品の世界観をふくらませることができるのではないかと感じた。